

短編CM小説「通過点」

加速する現代社会。AIの進化に宇宙進出：人類の夢は日々叶えられ古
いものになっていく。だがまだ叶えられぬ人類の夢があつた。そう、それ
はひらパーの最寄駅「枚方公園駅」に特急が止まること。

基本的に準急と普通しか止まらない。電車でひらパーに向かう者すべて
が願う「特急よ、ひらパーに止まれ」という願い、だが特急は枚方公園駅
をあっさりと通り過ぎてしまう。フーンという音とともに走り去ってい
く儂い夢。

わかりきっていたことじゃないか。人々はいそいそと準急や普通に乗
り込んでいくであろう。こうして人は大人になっていく。遊園地に向かつて
行くというのに。

だがここに一人、人類の夢をあきらめない男がいた。

ひらかたパーク園長。

「枚方公園駅に特急？ 止めてやろうじゃないの！」

こうして一人マイクを持って、枚方公園駅に立つ男、駅員の口ぶりです。「えー枚方公園駅に特急止めます」人類の夢をさらつと、しかしなめらかに駅員アナウンスで代弁。声の擬態と表現してもいいかもしれぬ。園長の思いのこもった声は時空を越えて特急の車内にまでひびく。

そう、その時、ちようど特急はひらかたパークにさしかかり、車窓には遊園地の全景が光に包まれ輝いている。車内の家族が遊園地をうつとりと眺める。ここに一枚の絵が完成する、さあ、時よ止まれ。

…ここで目がさめた。園長の目の前を通過する鉄の塊。風に揺れる前髪。枚方公園駅に特急が止まるだなんて。危うく夢を見るところだったよ。

結局のところ僕（ひらパー）は君（特急）の通過点に過ぎなかつたの？

だが遊園地はすべての人々にとつての通過点ではないだろうか。だからこそ、そこは夢の場所なのかもしれない。

あつけらかなとした表情でポツリという園長。

「無理でしたー」。

完